

北京における調査全体を振り返って

（張 燕）

ベネッセ次世代育成研究所は2010年2～5月に東アジアの5大都市圏（東京、ソウル、北京、上海、台北）において幼児の生活アンケートを実施した。今回の北京における調査では、親に対してアンケートを郵送し回収した。本稿では、北京の調査結果について初歩的な分析を行いたい。本調査のサンプリングのカバー率や回収率の低さから、本調査結果の適用については慎重に行う必要があると考えている。

一. 北京市の幼児およびその家庭の基本的な状況

1. 調査対象の多くが一人っ子の家庭で全体の90%以上を占め、一人っ子政策の効果が表れている。
2. 北京の常勤者（フルタイム）の母親は全体の72.9%と東アジアの中では突出している。フリー（在宅ワーク含む）の母親は10.3%。専業主婦は少数となっている。
3. 両親の最終学歴は、「高等学校」「中等専門学校・技術労働者学校」以下と「大学専科」以上がそれぞれ2割と8割。幼児の両親の年齢は31～40歳に集中しており、26～30歳の比率も比較的多い。

二. 北京における幼児の生活の特徴および問題点に関する考察

1. 北京の就園率は97%で東アジアトップ、幼稚園が託児サービス機能を担う。

北京の幼児の97.0%が幼稚園などの託児施設に入園し、就園率は東アジアの都市でトップである。幼児は1日10時間近くを幼稚園で過ごしているが、これも東アジアの5都市の中でトップである。北京の託児施設は共働きの保護者（多くの母親は常勤）のニーズに対応し、サービス時間が長いだけでなく、3食おやつ付きの食事サービスも提供して親の負担を軽減するなど、託児サービスの社会的役割を上手く担っている。

2. 幼児の生活様式と親の教育観は伝統文化と地域の風習に影響されている。

北京における幼児の平日平均昼寝時間は1時間半で、平均夜間睡眠時間を合わせると1日11時間を超え、子どもの成育に好ましい睡眠時間に達している。平均昼寝時間と平均合計睡眠時間は、北京、上海、台北ではほぼ同じである。また、年長者と同居して子どもの面倒を見てもらうことについても3都市の状況は似通っており、これは中国の伝統文化、子育て方式および生活習慣と関係があると思われる。上海の幼児が幼稚園で過ごす時間は北京よりも若干短く、これは地方の風習と主に関係がある。上海では一般的に幼児は家で朝食と夕食をとり、幼稚園では食事1食と2回のおやつが提供される。

北京の親は託児施設の教育機能を比較的適切に理解している。園への要望として、幼児の親が選んだ上位2項目は「子どもに友だち付き合いが上手になるような働きかけをしてほしい」と「集団生活のルールを教えてほしい」で、幼稚園が集団教育機関としての重要な役割を求められていることがうかがえる。またこれは中国における一人っ子を育てる上での客観的ニーズを示すものでもある。北京、上海、台北の3都市における「知的教育を増やしてほしい」はいずれも高く、3都市の親は、文字や数はできるだけ早くから教えるのがよいと考えている。これは知識と知能が重視される中華文化の特徴を物語っている。

子どもの将来に対する期待においては、北京の親は「自分の家族を大切にする人」を最も多く選んでいるが、これは他の都市とも全く同じであり、東アジア国家の文化における共通点といえるだろう。

3. 習い事は一般的で市場の影響も大きい。

北京において幼児の習い事は極めて一般的で、園内もしくは園外で習い事をしている比率は8割近くと、東アジア5都市においてトップである。幼児の英会話教室への参加率は、上海で1位、北京及びソウルで2位、台北で3位となっており、西洋文化が今でも東アジア諸国にとって憧れであることを示している。近年、社会における幼児の習い事市場は広がりを見せており、習い事の種類も学習系や芸術系、スポーツ系と多岐にわたっている。このため、一人っ子の親にとって市場の強力な流れに逆らうことは難しい。こうした習い事は必然的に

自由な遊び時間を圧迫し、子どもの学習ストレスは増加している。

4. 一人っ子家庭特有の子育ての悩みや焦りがあり、専門的なサポートが急務。

北京、上海、台北の3都市では、園への要望として「知的教育を増やしてほしい」が94%に達している。これは文化的な背景が共通しており、知的教育を偏重する社会的風潮と明らかに密接な関係がある。北京の親が子どもの学歴に対してかける期待は比較的高く、子育て観についての項目で「世間で名の通った大学に通ってほしい」と回答した比率は上海に迫っている。都市部の家庭は一人っ子であることが、功利的な教育への傾倒に拍車をかけているのかもしれない。

北京の母親は、子育てに対して全般的に肯定的な感情を持っているが、一人っ子であるため、子育てにおいてしばしば、「子どものことでどうしたらよいか分からなくなること」、「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になること」などの悩みを直面している。母親の多くはフルタイムで働いており、仕事をしないといけないのと同時に子育てもしないといけないため、プレッシャーが大きい。また、一人っ子の状況や市場の煽りが育児不安を増大させ——「負けられない」と思い、母親は健全な心理状態を保つのが難しい。

園に対しては「保護者同士が交流できるような支援をしてほしい」、「子育て相談ができる場所になってほしい」と要望している。これはまさしくこれまでの就学前機関にこの部分が欠けていることの表れであり、改善や専門的なサポート機能の強化が急務であろう。幼児教育機関は、幼児に対して保育と教育を施し、また保護者に対して託児サービスを提供する。また専門機関として、保護者及び社会の人々に科学的な育児観や科学的な育児に関する知識技能を伝え、教育の功利性の傾向を変えていくのに努力すべきである。おそらくこの問題は、園の役割とさらなる課題として考える必要があると思われる。